時事新報

明治廿七年十二月八日　土曜日
舊曆甲午十一月十二日（甲、申）
日出午前六時四十分　日入午後四時二十六分
月出午後一時二十分　月入午前一時三十三分
滿潮午前零時三十二分　午後一時五分
（西曆一千八百九十四年）
年始より三百四十二日
年末まで二十三日

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり
時事新報には毎號詳細なる商況物價の報告あり

本社の戰況報道

今や我軍は既に支那の國境に侵入し其攻擊の點も一ならず之に應ずる本社報道員の部署も隨て變更せざるを得ず由て石川信氏を廣嶋に高見龜氏を朝鮮京城に轉じ更に堀井卯之助氏を特派して第二軍に隨行せしめ又宮本芳之助氏を軍艦に乘組ましめ以て今後の戰況を報道するに遺漏なきを期す、今本社特派員の所在地と擔任事項を列記すれば左の如し

大本營所在地廣嶋　石川信
大本營所在地廣嶋　足立莊
朝鮮京城　高見龜
第一軍隨行　間利子八五郎
第二軍隨行　堀井卯之助
軍艦乘組　宮本芳之助

戰況畫報隊

畫報擔任　淺井忠
寫眞擔任　淺井魁一

時事新報

軍國の急務

今日の塲合に軍國の急務を云々するときは或は言はずもがなの議論を述了するものもあらんかなれども決して然らず我輩は其事のますゝ急にして一日も等閑に付す可らざるを見るものなり目下征淸の軍隊は連戰連捷向ふ所前なく敵は殆んど戰鬪力を失ひたると同樣の有樣なれば何れ遠からずして自から屈服することならん若しも屈せずして日一日を躊躇するときは我軍はますゝ進んで彼の四百餘州を蹂躙し自から爲す可き所を爲して止まんのみ恰も一擧手一投足の勢にして其局を收むるは何れにしても容易なりと雖も更に一方を顧みるときは今度の戰爭の結果は日本國をして世界諸强國の列に就かしめ隨て其競爭の渦中に投ぜしめたるものにして我名譽の高きと共に其負擔もますゝ大ならざるを得ず支那の老大國が腐敗の極點に達して早晚殲滅を免れざるは今更らの事に非ずして識者の疾に認めたる所なれども今回の始末を見れば餘りに豫想外にして只呆るゝの外なし歐洲諸國の中には年來東洋に意を注で機會の到來を窺ふものなきに非ず目下の如き塲合に際しては何とか口實を設けて事に干渉し自家の利益を收むるの擧動に出づ可きこと當然の成行なるに今日に至るまで諸國共に恰も袖手傍觀して容易に手を出さゞるは如何なる次第なるや寧ろ怪しむ可きに似たれども本來彼の諸國中には東洋の事に付き互に利害を殊にして其關係最も微妙のものあり若しも一國が先んじて手を出すときは忽ち衆國の衝突を來して世界の全體に容易ならざる波瀾を引起すの掛念あるが故に姑く猶豫して時勢を觀望するのみ其內心は火の如くにして纔に表面の發熱を抑へつゝあるのみとなれば若しも支那がいよゝ支ゆること能はずして自から破滅を招き四分五裂の有樣を呈するの塲合となれば決して坐視するものに非ず好機乘ず可しとて銘々に自國の利害を主張し結局諸強國の一大競爭を見るに至るやも知る可らず我征淸の目的は只彼の無禮を懲らし將來を戒しむるが爲めにして其國土の分割の如き敢て期する所に非ざれども事茲に至ては正當防禦の爲めに國權維持の爲めに止むを得ず其競爭の渦中に投じて大に爲す所なきを得ず即ち其敵たり味方たるに拘はらず對手は歐洲の强國にして支那朝鮮の如き弱國の比に非ざれば苟も其間に立て我面目利益を全ふせんとするには少なくも彼の諸國の權衡を變化せしむるに足るの力を備へざる可らず軍國の急務いよゝ切迫したりと云ふ可し或は支那が既に其非を悔いて速に降伏の實を表し戰爭の局を結ぶにも至らんには彼の老大國も一寸生延たる姿にして諸强國も手を出すの機會を得ず此處姑く安心なるに似たれども左なきだに腐敗老朽の極點に達して早晚自滅を免れざる其處に今回日本軍の一打擊は彼の政府の基礎を震動せしめて自滅の機會を促したること疑なければ愛親覺羅氏の運命は恰も風前の燈と一般、今後數年を出でずして危ふかる可し明白なる成行にして事の端は內より發するか外より來るか豫め知る可らずと雖も國土の分割は到底免れざるものとして扨その曉に至れば日本は假令ひ主動者の地位にあらずとするも自國の利害より又その破滅を促すに大に力を費したる其勞費の點よりして是非とも諸强國の競爭中に投じて相當の利益を分たざる可らず而して其機會の到來は決して遠からざること疑なければ今度の結局は何れにしても軍國の急務は決して怠る可らず若しも敵國に報復の力なきを侮り眼前の勝利に安んじて軍國の事を緩慢に付し去ることもあらば今後數年ならずして大に悔ゆるの時ある可し我輩は我國民が目下戰爭の最中より早く此點に着眼し大に軍備擴張の事を講じて一旦の機會に日本國の名譽利益を全ふするの覺悟あらんことを切に希望するものなり

雜報

○石黑野戰衛生長官の旅の日記（前號の續）

三十日　昨夜來風起り船動搖し船病に堪へず因りて船底に困臥し朝食を缺ぎ甲板に出づること能はず午前十一時に至り同乘諸氏船室に來り船已に大同江に近づきしことを報ず零時にして漁隱洞に着し投錨す船中より望めば大同江口、洋々として海の如く兩岸遙に連山を見る山の一角旭旗を揭げ天幕を張るものあり山角を遶りて僅に灣をなす所に苫屋數戶と天幕とを見る是れ漁隱洞なり須臾にして短艇を下し船員に謝詞を述べ同乘の山田、柏田、伊知地、五十嵐諸氏に別れ船長幷に早川、長谷塲二氏と共に上陸す他の諸氏は第二軍に往くを以て此地に上らざりしなり長谷塲氏も亦第二軍に行くものなれども陸上の近事を聽かんと欲して同じく此地に上陸す

漁隱洞は朝鮮國長連縣の一村にして此地を距ること一里許の所に在り此地は漁隱洞の枝村なる五里浦と稱する所にして人家十餘戶に過ぎざる寥々たる一漁村なり朝鮮の俗村をば洞と稱し海邊の小村を浦と謂ふ往日我海軍艦隊此處に於て上陸所を發見し尋で陸軍兵站部を置きたるものにして兵站部設置以來未だ二十餘日に過ぎざるのみ海岸の新造波止塲より上陸し岸上に上ること三町許苫葺の假廠あり即ち兵站部なり入りて司令官步兵少佐武田信賢氏、副官砲兵中尉山中弘太郎氏に遇ふ武田氏は先年近衛に在りて衛生隊演習の際數日間氏と演習を共にし元と知る所なれども其後氏伊豫宇和嶋に歸休し別後已に六七年互に兩鬢の霜を增し一見今昔の感に堪へず手を把りて今回開戰以來連勝の祝意を陳べ天皇陛下の御健康を報じ互に日來職事に盡すの勞を謝し爐火を擁して足を暖め此地の近況を聞けり抑兵站部の事務は實に繁多にして此地の如きは日々船にて內地より積み來る糧食被服より諸種の物品及び人員馬匹に至るまで實に夥しきものにして此地より更に朝鮮平壤に向くるものと朝鮮義州地方へ向くるものと又清國金州地方へ向くるもの皆一度は此處に集まるなり今日も灣面に五艘の汽船集まり居りて滿潮時には解艇を以て積荷を陸揚げす去れども滿潮ちたりとて風烈しければ解艇危ふして荷卸し出來ず風なくとも滿潮たざれば荷卸し自由ならずかてゝ加へて解艇は內國のものより小なるは汽船にて送り、大なるは天氣を見合せて舟航するものなるが故に其數極めて少なく之を引く小汽船は僅に二つ故其荷卸し容易ならざることを推知すべし現に余を載せて上陸せしめたる遠江丸のボートは四人の船手にて漕ぎたれども夕方は風強くしてやうやく本船に歸るを得たり風吹けば則ちその波の荒き以て思ふ可し尋で武田司令官に向ひクイン浦に行く船の有無を問ふ司令官曰く船のみとは黑井海軍大尉之を審にす同氏に問はるべしと暫にして黑井氏外より至る一禮してクイン浦行の船を問ふ氏曰く本日クイン浦行の船なしと武田司令官側に在りて曰く然らば閣下余の室に休息し給へとて右方の室に延けり乃ち早川氏と共に其室に入れば一人の恭しく禮して入來り名刺を出す者あり陸軍三等軍醫佐伯隆資氏にして亦平壤に赴かんが爲め船を此處に待つものなり行李を開き衣の塵埃を拂ひ更に出でゝ司令部の近隣を逍遙す此地海に濱する小丘にして小丘四足を海に出し一灣を前灣中灣內灣の三に小別す前灣と中灣との間に一の小岩山角海面に斷立す其上に國旗を揭げ二個の天幕を設け黑井海軍大尉之に居り海軍信號手二人を置きゝ船舶に信號を示す中灣に濱する小丘に苫屋數戶、天幕二戶、新設の倉庫あり兵站司令部炊塲、郵便部、倉庫官、人夫小屋等此處に在るなり遙に小徑を步して小丘を超へ內灣に至らんとするに前より來る者あり漸く近きて見れば陸軍技師工學士瀧大吉氏なり氏近眼余の此處に在るを知らず匆々通過せんとす余乃ち其肩を拍ちて瀧君と呼ぶ氏驚きて懇む握手相見るを喜び此處に病院を設置するの計畫を話し今頃閣下の着せられんことを計りて迎に赴くなりと乃ち手を携へて山徑を過ぐ人戶兩三韓人群集す韓人近村より來りて物を鬻ぐなり其品は雞、卵、飴、餅等なり卵は稻藁にて包裹するを本邦に異ならざれども雞は木を撓め笈を作り藁繩の網にて笈をかゝり恰も顯光山入りの負笈の如きものゝ中に數羽を入れ負ふて之を賣る其人は皆白衣黑帽嚴然たる冠帽一見其服裝の整備を嘆ぜしむ因に云ふ韓人の帽即冠は一見以て其未だ冠禮せざる者と既に冠禮せし者とを表はし居る者とを區別せしめ衣服足具とも全國一樣にして如何なる下等の人と雖も裸體露足なるものなし此冠帽に付て考古考證的の說あれども茲に述べず

卵は卅個にて本邦通貨凡十五錢、雞は凡二十錢、豚は二圓五十錢、小牛は十二三圓なり而して近日閣令の命によりてイヤ〱十錢銀貨を受くれども物を買ふには韓錢ならざれば自由ならず此處を過ぎ田間の小徑を經て一天幕あり大倉組の居を以て工作人夫を督する所なり大倉組の本間俊平氏と工學士中濱西一郎氏之に居る皆知人なり小丘を遶り山陽稀平なる所に至れば人夫數人土を掘り屋を葺き廐廠を造る是病院なり瀧氏と彼是土地を議し遶りて小堤上の小路を步し溪流に添ふて水溜所を定む軍艦に運船に陸上の炊事に日々要する所なれ

ども素より井在
に陸海の用に供
り余大に其擧を
手蹟を遺し以て
所を定む此處に
當りて諸所より
の際一時停留す
のものにあらず
上に假床を設け
ぐに止まれり蓋
豚を飼養する所
地に於て之を從
煉瓦の大廈高樓
て此に入る者は
可し夫苦樂は此
生ずるものなれ
屋に臥すを以て
物とて辛苦
り

日本赤十字社
川兵站部軍醫部
事するの任務
祝し病院地の
都宮病院長た
の內に住せし
なく得々として
十月三十一日
嗽水を取らし
を終らざれば
前面に松幹二
の空罐を杓と
を以て盥嗽せ
上る厠は屋後
上れば海風凜
復嗽塲に至れ
他客讓りて余
早川兩氏と爐
み武田氏囊中
既にして瀧技
購ひしむ價十
に祝酒を擧ぐ
に停りて三日
を乞ふと氏と
墓地を撰定す
とせず若し死
司令部に歸り
て之を賞味す
削きしなり食
藥劑官大井玄
より着し今上
來りたれども
力なく先づ小
るなりと大井
藥物供給のみ
至るまで藥品
るものなり今
浮べ爐邊六月
る假に戶を排
氏なり座に入
と雖陸上閣下
力め波を凌ぎ
兵の最初より
部長として織
心苦慮以て今
して暫く一語
ゆ乃ち從卒を
しむ食ひ終り
に至り大井は
丸に乘じて此
病を醫し余ぞ
夜八時後黑井
に滿んとし而
明日期すべか
戶を出で黑井